

創作<万葉能>

「亡妻思慕」

令和四年一月 有田百代

- ▷前シテ 大伴坂上郎女
- ▷後シテ 亡き大伴郎女
- ▷ワキ 大伴旅人

世の中は空しきものと知る時しいよよますますかなしかりけり

長官として長らく滞在した大宰府から  
大納言となり奈良の都へ戻った旅人。  
大宰府で亡くした妻を偲びながら  
今日もひとり、眠れぬ夜を過ごしている。

～京なる荒れたる家に一人寝ば旅に益りてくるしかるべし～  
～人もなき空しき家は草枕旅にまさりて苦しかりけり～

眠れぬ夜を抜けようと、旅人は庭へでて、咲いた白梅を眺めつつ  
ひとり酒を飲む。

～我が宿に盛りに咲ける梅の花散るべくなりぬ見む人もがも～  
～梅の花夢に語らく風流びたる花と我思ふ酒に浮かべこそ～

酒器のなか。

酒の波に目を泳がす。

己の逢いたい人はどこにおる。

白梅の花びらが一枚、また一枚と酒に迷い込む。

何処からか、と視線を上げると

舞い散る白梅の向こう側、

妻によく似た姿の女性があらわれた。

よくよく目を凝らすと、大伴坂上郎女であった。  
妻亡きあと、大伴家を支えてくれる義妹である。

「驚くではないか、こんな時間にどうしたのだ、郎女」

「いえ、物音がしたものですから。お兄様のような気がいたしました。  
眠れぬのですね。お気持ちはお察しいたします。  
けれども、お兄様は大伴家の主。  
いつまでこうしておられるつもりですか。  
そろそろ、気を取り戻して頂かねば」

「わかっておる、わかってはおるのだ。  
しかし、心の憂さは自分ではどうすることもできぬもの。  
酒を呑んで、寂しさを拭うしか、今のわしにはできぬ。  
この白梅が、咲いているうちだけで良い。  
せめてもう少しだけ、酔わせてはくれぬか。  
そうじゃ、郎女。  
久々にそなたの舞がみたいもの。この舞い散る白梅ともに  
願おうではないか」

「仕方のないお兄様ですこと。  
私ごときの舞で、気を取り戻していただけるのでしたら、  
ご覧に入れましょうか」

ちらちらと舞う白梅の花びらのなか、郎女は舞をおどる。

<中入り>

「旅人さま、起きてください。  
こんなところで寝ては風邪をひいてしまいますよ」

ふと、隣を見ると、亡くなったはずの妻が隣に座っている。

「そなた、いつからそこに……」

「ずっと、ずっとおりましたよ。  
あなた様のおかえり、いまかいまかとお待ちしておりました。」

「そうかそうか、全ては夢であったか。  
覚めてくれたか。まったく忌まわしい夢を見たことよ。」

「それはお可哀想なことを。  
気を取り直して、見てくださいな、貴方と作ったこの山齋。  
こんなに小高く立派になりましたでしょう。  
この白梅も、こんなにも立派にのびのびと育って。」

「ああ、ああ。  
これは、大宰府へ行く前にそなたと作った庭。  
立派に守り育ててくれていたか」

「上京の旅路は、さぞお大変でしたでしょう」

「鞆の浦の磯のむろの木も、敏馬の崎も

どこを通っても、そなたとの思い出ばかりであった。

その度に、涙ぐんでばかり。

随分と弱い男になったものだ。

けれども、こうしてまたここに並んで、思い出話ができる幸せとは、  
いかばかりか」

～<sup>わぎもこ</sup>吾妹子が見し鞆の浦のむろの木は<sup>とこよ</sup>常世にあれど見し人そなき～

～鞆の浦の磯のむろの木見むごとに<sup>あひ</sup>相見し妹は忘らえめやも～

～磯の上に根這ふむろの木見し人をいづらと問はば語り告げむか～

～妹と<sup>こ</sup>来し<sup>みぬめ</sup>敏馬の崎を<sup>かへ</sup>還るさに独りし見れば涙ぐましも～

～<sup>ゆ</sup>往くさには二人わが見しこの崎を独り過ぐればこころ悲しも～

「まあ、それは嬉しいことをおっしゃいます。

遠い遠い九州への旅路は、それは大変でございました。

けれども、貴方様がいてくださったので、私は平気でした。

怖い道のりも、貴方様の強き背中を追うことで

どんなに心頼もしく思えたことでしょう。

貴方様を尊敬し、そのお人柄に包まれて

お側にいられる喜びを、いつも噛み締めておりました。

その袖に抱かれて観ましたむろの木も、

海辺の夕陽に染まった貴方様のその横顔も

全て全てが私の、よき思い出にございます。」

「何を言っておるのだ、郎女。  
思い出などと、そなたはまだまだここにおる。」

「貴方は大変にお強い方、立派な丈夫でございます。  
もう大丈夫です。  
また、いずれ……  
必ずや、私たちは逢えますよ。  
二人で植えた、この白梅。  
私だと思って、大事に育ててくださいね。」

この季節、白梅を見たのなら  
私を思い出してくださる約束。  
覚えていてくださったこと、とても嬉しゅうございました。  
私にとっては、それだけで充分でございます。」

白梅の向こうへ消えている妻。

～吾妹子が植えし梅の木見ることに心咽せつつ涙し流る～

縁側に腰掛け、柱にもたれたまま眠る旅人。  
頬には涙がつたっている。

坂上郎女は、旅人の肩に綿を羽織らせ見守った。

<歌一覧>

神亀五年戊辰。大宰の帥大友卿の故人を思恋（しの）へる歌三首

うつく 愛しき人の纏きてし敷栲のわが手枕を纏く人あらめや  
ま しきたえ たまくら  
愛しいあの人の枕としたわが手枕を、ふたたびする人はもういない  
(巻3・438)

かへ 還るべく時は成りけり京師にて誰が手本をかわが枕かむ  
みやこ た たもと  
いよいよ還るべき時になったことだ。しかし都で一体誰の腕を私は枕としよ  
う  
(巻3・439)

みやこ 京なる荒れたる家にひとり寝ば旅に益りて苦しかるべし  
まさ  
妻もなく荒涼とした都の家に寝たら、苦しいはずの旅以上に心和まぬ事だろ  
う  
(巻3・440)

右の一首は、別れ去にて数句を経て作れる歌なり

天平二年。冬十二月に、大宰の帥大伴卿の京に向ひて上道せし時に作れる歌  
みちだち  
五首

わぎもこ 吾妹子が見し鞆の浦のむろの木は常世にあれど見し人そなき  
とこよ  
わが愛しい妻が往路にみた、鞆の浦のむろの木は、長く命を保っているの  
に、見た妻は今はいない。  
(巻3・446)

鞆の浦の磯のむろの木見むごとに相見し妹は忘らえめやも  
あひ  
これからも鞆の浦の磯に生えたむろの木を見るたびに、共に見た妻を忘れる  
ことはないだろう。  
(巻3・447)

磯の上に根這ふむろの木見し人をいづらと問はば語り告げむか  
磯のほとりに根を伸ばすむろの木よ。かつて見た人は今どこにいるだろうか  
と私が聞いたら、お前は語って教えてくれるだろうか。

(巻3・448)

妹と来し<sup>こ</sup>敏馬<sup>みぬめ</sup>の崎<sup>かへ</sup>を還るさに独りし見れば涙ぐましも  
妻と二人で見た敏馬の崎だのに。帰路に一人で見ると、思わず涙ぐまれる  
よ。

(巻3・449)

往<sup>ゆ</sup>くさには二人わが見しこの崎を独り過ぐればこころ悲しも  
往く時には二人で見たこの崎を、私一人見ながら崎が遠ざかると、心も悲し  
みにくれることよ。

(巻3・450)

『故郷の家に還り入りて、即ち作れる歌三首』  
人もなき空しき家は草枕旅にまさりて苦しかりけり  
愛する妻もない空しい家は、草枕の旅以上に心満たされぬことよ。

(巻3・451)

妹として二人作りしわが山齋<sup>しま</sup>は木<sup>こたか</sup>高く繁くなりけるかも  
妻と二人で造ったわが家の庭園は、樹木も高くうっそうと茂っていたこと  
だ。

(巻3・452)

吾<sup>わぎもこ</sup>妹子が植えし梅の樹見るごとにこころ咽<sup>む</sup>せつつ涙し流る  
わが妻の植えた梅の木を見るたびに、心もむせ返るばかりに涙の流れること  
よ。

(巻3・453)

